

第6回 千里浜再生プロジェクト委員会 会議概要

1. 日時：平成26年10月30日（木）14：00～16：00

2. 場所：石川県庁舎11階1109会議室

3. 会議次第

1) 議事公開の可否について

- ・委員長から議事公開の確認が行われ、委員の了承を得た。

2) 千里浜再生プロジェクト委員会 検討資料説明（資料－3）

①これまでの経緯について

②平成26年度の実施状況報告

（ソフト事業、浚渫土砂の海上投入、砂流出防止工）

③新たな人工リーフの検討について

（設計方針、設置諸元）

④今後の予定について

- ・事務局から①～④について説明が行われた。

- ・各委員からの主な質疑・意見内容について、次ページ以降に示す。

1. 各委員からの主な質疑・意見

1. 1 海岸保全の意識向上のための取り組みについて（ソフト施策）（資料P5～7）

・千里浜ウォークでは、1m²当たりのゴミの量や、昨年と比較して今年ゴミの量は多かったのかなど、何か定量的な調査はしているか。定量的にまとめておいた方が、自分たちで海岸をきれいにしたんだという意識の向上につながる。

→（事務局）調べれば合計の量はわかる。

→（委員長）定量的にまとめた方が有効である。

1. 2 浚渫土砂の海上投入について（資料P8～17）

・海上投入の量について、最大2万m³以上は投入しなければ効果が出ないと考えてよろしいか。

→（事務局）平成24年度は1万5千m³、平成25年度は2万5千m³を投入した。海底地形の変化は、平成24～25年度にかけては約9万m³減少しており、平成25～26年度にかけては約10万m³が増加している。投入量と比べてかなり多くの量が動いていることになるため、投入量の多い少ないがこの結果に影響したとは言えない。

・（委員長）投入した土砂は直近の南側に移動したであろうということか。

→（事務局）断定はできないが、例えばP12では全体的に減少傾向なのに対して、漂砂の流れを考慮すると、投入箇所より南側で、若干減少量が抑えられている。逆に、P13の方では全体的に増加傾向なのに対して、投入箇所より南側ではさらに増加している。これは投入による影響だと想定している。

・海象について、平成24～25年度にかけて、また、平成25～26年度にかけて、例えば数年間で見た場合の波向や海岸流の違いは検討しているか。

→（事務局）千里浜沖に海象計を設置しているが、海底地形の変化との関連性は確認していない。ただ、グラフで示した範囲の右の方には羽咋川があるため、降雨により出水があると、例えばフラッシュ等があることも考えられる。そのため、今後は、降雨データと海底地形の変化の関連性も検討していきたい。

・出水の影響があるかもしれないというのは、平成25～26年度にかけての方か。

→（事務局）はい。羽咋地区では、平成26年度の8月上旬～中旬にかけて、観測史上を更新するような降雨があったため、その影響があると想定している。

・砂の話がメインになっているが、ゴミがどこに集まってくるのかという話も、海象を知るひとつの手掛かりになる。ゴミから知ることもある。

・（委員長）金沢港における浚渫工事完了後の定常的な浚渫について、それを減少させるため、技術的にどんなことが可能か、何か港湾のほうで考えているか。

→金沢港への砂の流入を防ぐ目的で整備した防砂堤の効果を一度検証し、これから本格的に対策を考えていかなければならない。さらに、その検証の中で、もう一度砂を海流に乗せる対策も、場合によっては検討しなければならないと考えており、この検討会でもご指導していただければと思っている。

- ・底生生物の種類や量が、投入後にだいぶ減少しているが、冬期風浪後には復活していることから、自然界の大きな揺れ戻しが起きているのではないか。そういう意味では、投入による影響は小さなスケールでの現象であったと思う。是非、調査を継続していただきたい。

- ・この底生生物調査の結果では、非常に極端な変化は起きなかったとしか言えない。今後の調査では、影響があった場合の因果関係を説明できるよう、どんなデザインでサンプリングするかをもう少し工夫した方がよい。また、それと同時に変わった現象が起きていないかをよく目配りしておく必要がある。例えば、いたずらにサンプリング数を増やすのではなく、漁業者に、漁獲物等の変化について意見を聞くなど、場所的にもう少し広めの範囲でこれまでとは違ったタイプの情報を関係者から得ていくモニタリングを計画してはどうか。

→(委員長) 底生生物への影響については、投入箇所付近の局所的な影響は見られないが、千里浜海岸全体での評価としては、学術的にこれだという決定的なところまでは行っていないと理解するのがよい。今後、提案のあった新しいタイプのモニタリングを検討していただきたい。

1. 3 砂流出防止工（サンドバック）について（資料P18～20）

- ・サンドバックより岸側では、時期によってかなり砂が動き、砂がずっと安定していないため、今後の継続調査では、その辺を踏まえて時期を細かく区切って汀線観測をした方がよい。

→(事務局) 現地には、リアルタイムで観測できるカメラを設置している。引き続き、時期ごとの状況を観測していきたい。

- ・(委員長) 新しいサンドバックの観測体制として何か追加したことはあるか。

→(事務局) 新たにカメラを設置する予定である。

- ・サンドバックの岸側において、沿岸方向で粒径分布が一様の場合、砂面の高さで地下水水位について教えていただきたい。

→(事務局) 夏場の潮位が高い時期は地下水が高く、秋になると潮位が下がるにつれて地下水位も下がる。サンドバック周辺では、夏と秋で大きな水位差が見られるため、今後、サンドバックと地下水位の間連性についても検討していく。

1. 4 新たな人工リーフの検討について（資料P21～33）

- ・人工リーフの漂砂制御、砂浜の制御は非常に難しい。今回の考え方は、経験工学的にか

なり検討されており、説得力のあるものになっている。

- ・ドライブウェイの走行性との関係から、堆砂した砂面の締まり具合がどのようになっていくか、気を付けておいたほうがよいと感じている。
- ・今浜地区の人工リーフの岸側に堆砂した砂の粒径と、もともとあった砂の粒径に変化はないか。

→（事務局）今後、締まり具合も含め調査する。

- ・万が一、うまくいかなかった場合、例えば、すぐに壊せるように、サンドパックのようなものをこの人工リーフに活用するというのも一つの考えだ。

→（事務局）サンドパックでは、施工が困難である。今の段階では、実績のある捨石とコンクリートブロックを使ったものがよいと考える。モニタリングしながら、ブロックの継ぎ足し等というかたちで柔軟に対応できる。

- ・人工リーフを設置すると、リーフ岸側が掘られたり、洗掘孔ができたりする。汀線測量も大事だが、リーフ周辺の海底地形の変化も観測することが大事である。

1. 5 今後の予定について（資料P34～35）

- ・来年度の海上投入についても、漁業者の意見を反映したかたちで説明するようお願いしたい。また、金沢港に入る砂を止める方策は、継続性、効果性、経済性に優れていると思われるため、漁業者に対しては受け入れられやすい。その検討を是非とも一つの方法として考えることを希望する。

- ・年度内着工というのはいつ頃か。

→（事務局）工事の実施時期については、年度内に工事を発注し、まずはブロック製作に取りかかり、海水浴シーズン前までには、海上作業を終える予定である。人工リーフが1基完成するのに、2～3年はかかる。